

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：32672

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350736

研究課題名(和文)ドイツとスイスにおける「動きのある学校」の成果と課題について

研究課題名(英文)Achievements and issues on the moving school in Germany and Switzerland

研究代表者

近藤 智靖 (Kondoh, Tomoyasu)

日本体育大学・その他部局等・教授

研究者番号：50438735

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、主にドイツの「動きのある学校」並びに「動きのある幼稚園」について検討をした。平成25年度は「動きのある学校」を支援する学校外の組織との関係について検討をしてきた。平成26年は、「動きのある幼稚園」を訪問し、そのプログラムについて検討をした。平成27年度は、「動きのある学校」を主導的に研究しているエックカート・バルツ氏と、「動きのある幼稚園」を主導的に実践しているレナーテ・ツィマー氏の両名を招聘し、同プロジェクトの成果と課題について検討をした。

成果としては、幼稚園や学校の経営の柱に運動が大きく寄与している点であり、課題としては、財政基盤や実証的研究の不足などであった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate achievement and issues on the moving school and the moving kindergarten in Germany. We investigated relations between the moving school and outside organization of the moving school in the first year. And we visited some moving kindergartens in Germany and analyzed these projects in the second year. Finally we invited two professors, Mr. Eckart Balz and Mrs. Renate Zimmer from Germany to discuss achievements and issues on these projects.

The most important achievement of these project was to contribute to management of the schools and kindergartens. The issues were weak financial base and few empirical researches.

研究分野：スポーツ教育学

キーワード：動きのある学校 動きのある幼稚園 動的授業 運動休憩 生活空間としての学校 運動空間としての学校 学校プログラム

1. 研究開始当初の背景

子どもたちの健康や体力を問題視する報告は教育行政や新聞・テレビ等のメディアにおいて頻繁に見られるが、こうした報告は、近年に始まったわけではなく、正木ら(1979)をはじめとして、様々な形で 1970 年代後半より継続的になされてきた。いずれの報告も、子どもたちの体力水準の低下や身体のおかしさを指摘しており、日常生活の改善や運動の推奨などを提言している。

こうした問題に対処する一つの施策として、全国各地に「体力づくり推進校」が定められ、体力向上に向けた様々な活動がなされているが、これらの取り組みは、主として体育授業の改善と充実、休み時間の運動の推奨、給食指導をはじめとした食育の推進、家庭との連携による生活改善など、健康や体力向上に直接寄与する活動が行われる傾向にある。

こうした取り組みに類似した活動は、欧米においても展開されているが、その中でも我々はこれまでドイツ語圏、特にスイスとドイツの試みに着目してきた。スイスとドイツでは「動きのある学校(Bewegte Schule)」という試みがあり、健康推進のための活動をはじめ、学校改革の中心に運動を据え、「学び」そのものを動的にするなど、様々な取り組みがなされている。

「動きのある学校」という試みは、1983 年スイス学校スポーツ連盟(Schweizerischer Verband für Sport in der Schule)(SVSS)の会議においてウルス・イリーが「負荷のかかる座位姿勢(Sitzen als Belastung)」というテーマで、長時間にわたる教室での座位姿勢が、子どもの発達にとって良い影響を与えないといった報告したことを契機として始まったプロジェクトであり、より健康を推進するための学習環境や活動プログラム、そして学校組織の再構築を目指した試みである。

この試みは、1993 年以降スイスからドイツに拡がり、健康という視点からだけではなく、障がいを持つ子どもとそうではない子どもの統合教育や、外国籍とドイツ籍の子どもの統合・交流教育、さらには、学校制度が半日制度から終日制に移行する際に、放課後の教育プログラムとして「動きのある学校」のコンセプトが取り入れられるなど、様々な拡がりを見せている。ドイツでは、ニーダーザクセン州、ノルトライン・ヴェストファーレン州、ヘッセン州、ザクセン州などをはじめとして、いくつかの州で大きく拡がっており、たとえば、ニーダーザクセン州内の「動きのある学校」への参加校は数百にのぼっている(Bewegte Schule Gesunde Schule Niedersachsen Online, online)。

この「動きのある学校」という試みは、体育授業(ドイツやスイスではスポーツ授業)という一つの教科の問題に留まらず、休み時間や他教科の授業、あるいは机や椅子など学習環境の面においても影響を与えており、教

科を越えた学校教育全般の取り組みになっている。

具体的に「動きのある学校」では、概ね以下の次のような取り組みが選択的になされている

(RegensburgerProjektgruppe,2000,p.19)。

- 1) 動的な学習空間(Bewegter Lernraum)
- 2) 運動休憩(Bewegungspause)
- 3) 動的な座位(Bewegtes Sitzen)
- 4) 動的な授業(Bewegter Unterricht)
- 5) 動的なスポーツ授業(Bewegter Sportunterricht)
- 6) 教科外の運動機会の充実(Bewegungsangebote im außerunterrichtlichen Schulsport)
- 7) 休み時間の運動の充実(Bewegte Pause)

この中で、我が国ではあまり馴染みのない 1)～4)及び 6)について簡単に説明をする。

- 1) 教室内で可動性のある机を使用し、授業中に動きながら学習できる環境を整えている。
- 2) 授業開始から 20 分程度経過した後、簡易なダンス、ウォーキングなどを行う。
- 3) 椅子が G ボール等、自然とバランスをとりながら座ることができるようなものとなる。
- 4) 学習内容と対応させながら、座学であっても長時間、椅子に座ったままで学習が進むのではなく、子どもたちが定期的に身体を動かし、椅子から離れるよう工夫することである。たとえば、7 年生向けの数学の課題では、以下のような身体を使って動きながら課題に取り組んでいる。

「チョークを使って広場で自由に三角形を書きましょう。全ての辺の長さや角度を測りなさい。そして、色を使って底辺と高さを示しなさい」(Trucco und Bucher,2000,p.175)

この他にも国語、外国語、音楽などの教科においても、動的な授業が展開されている。

- 6) 終日制の学校では、午後に外部指導者が来て各種のプログラムを提供する。

上記のように、「動きのある学校」では体育授業という一つの科目に限定せず、教育活動全体と関連して運動を取り入れている。

この試みについては、ドイツ語圏においてすでに様々な書籍、ホームページなどが開設されており、数多くの試みが紹介されている。また、我が国では、近藤ら(2010)によって同プロジェクト理念と実践が紹介されている。具体的には、「動きのある学校」は、4つの理念に分派しており、理念の違いによって実践の様態が異なっていたことが報告されている。また、スイスとドイツの同プロジェクトを推進する地域の実態についての報告があり、スイス・バーゼルにおけるウベ・ヒューゼの報告や、ザクセンのクリスティーナ・ミュラー、ニーダーザクセンやヘッセンのラルフ・ラギングやライナー・ヒルデブランドらを中心とした報告がなされている。しかし、これまでの研究報告では、大きく分け

て三つの課題がある。一つは、「動きのある学校」の試みが、どのように成果を検証しているのかという点である。様々な活動がなされているものの、成果を検証するシステム等の確立は、継続的な取り組みを行う上では必要不可欠な要素となる。こうした点が先行研究では十分に明らかにされていない。二つ目は、この試みを支える教員研修制度や予算の流れ、さらには、各学校と教育行政・地域のスポーツクラブ・保護者団体・保険安全団体など、基盤となる諸組織の連携について情報が十分ではない。こうした課題は、我が国でのこうした試みを適用しようとした場合、大きな壁となる課題でもある。三つ目としては、先行研究で取り上げられていない研究者や実践家達が複数存在し、たとえば、ヴッパータルのエックハート・バルツ、また幼児教育を中心としたオスナブリュック大学のレナーテ・ツィマーなどの考えについて十分に調査がなされていない。「動きのある学校」をより精緻に把握するためには、こうした人物の理念や取り組みについて調査をしていく必要がある。

2. 研究の目的

上記の三つの課題（成果を評価するシステム、成果を継続するための諸機関との連携、主要人物の試みの調査）を明確にしていくことが目的である。こうした研究を通じて、我が国の学校教育における健康・体力の推進、あるいは、学校教育の在り方について論議するための大きな手がかりを得ると考える。

3. 研究の方法

三つの課題「成果を評価するシステム」「成果を継続するための諸機関との連携」「主要人物の試みの調査」に向けてインタビューを中心として調査をしていく。具体的に「成果を評価するシステム」については、ザクセン州ライプツヒ大学のクリスティーナ・ミュラーが量的な調査を試みていることが現時点ではわかっている(Müller,2007,pp.198-200)。また、マールブルク大学のラルフ・ラギングらは教師や保護者へのインタビューなどの中心とした聞き取り調査を行っていることが現時点で確認できている(Projekt Ganztagschule ホームページ)。しかし、その他の研究者がどのような「評価システム」を導入しているのかについて広く情報を収集する。

「諸機関との連携」については、ニーダーザクセン州やノルトライン・ヴェストファーレン州、ザクセン州のドイツの3州の状況を確認した。

「主要人物の試みの調査」については、ヴッパータル大学のエックハート・バルツ、並びにオスナブリュック大学のレナーテ・ツィマーを我が国に招聘しキーノートレクチャ

ーや講演を通じ、本研究の目的に関連した話をしてもらった。

4. 研究成果

については、エックハート・バルツ氏が日本スポーツ教育学会第35回記念国際大会のキーノートレクチャーや、教育文化学会25回大会の特別講演においても語っていた通り、「成果を評価するシステム」は十分に確立されておらず、「動きのある学校」プロジェクト全体の課題として残されていた。

については、ノルトライン・ヴェストファーレン州の調査結果として、「動きのある学校」を導入している学校と、教育委員会・保険組合・スポーツクラブとの連携は頻繁に行われてはいるが、財政面での援助はわずかであるといった実態が明らかになった。そのため、財源の確保のために学校長を中心として、保護者会や卒業生の同窓会、あるいは地元企業との連携を図り、児童生徒が健康的に過ごしていくことのメリットを訴えながら協賛金を集めていく活動をしていた。また、教員研修制度については、大学の研究室を中心として小規模になされている場合と、「動きのある学校」「動きのある幼稚園」などに関連して、様々な研究大会や実技講習会などを通じて教師達が研修をしている姿が明らかになった。

については、エックハート・バルツからは、ドイツの「動きのある学校」の現状と課題について、総論的に解説をいただいた。「動きのある学校」が導入されていく背景には、学校における児童生徒の健康の保持増進という考え方以外にも、学習の質の向上や学校文化の創造といった視点がある。しかし、今後、継続的にこうしたプロジェクトが維持発展していくかは不明であり、教育界の動向を踏まえながら進んでいくことが予想される。ドイツで大きな潮流となっているアウトプットやコンピテンスへの志向の流れや、終日制学校の拡大など、様々な教育界の動向をとらえながらプロジェクトが進んでいく可能性がある。

また、レナーテ・ツィマーは、日体大における公開セミナーにおいて、幼児期になぜ運動を取り入れていくのかについての論拠と具体的なプログラムについて解説をいただいた。幼児は、身体を動かしながら身体的・社会的・知的に発達しており、運動を通じて幼児が様々な感覚的な経験を蓄積していくことは大変重要であると考えていた。具体的なプログラムとしては、園庭や園舎において「運動に親しめるような空間構成」をする点や、運動と静けさとの両方を盛り込むこと、定時の運動時間に加えて、様々な行事を設定するなどについて解説をいただいた。さらに、様々な有資格者（作業療法士や理学療法士、セラピストなど）との連携を図りながら、個々の幼児の課題に対応する組織づくりの大切さについても指摘していた。

以上，～ の課題について，3 年間の研究で明らかになった．

5．主な発表論文等

(研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

近藤智靖 (KONDOH TOMOYASU)

日本体育大学・児童スポーツ教育学部・教授

研究者番号：50438735

(2)研究分担者

田附俊一 (TAZUKE SHUNICHI)

同志社大学・スポーツ健康科学部・教授

研究者番号：30197389

岡出美則 (OKADE YOSHINORI)

筑波大学・体育系・教授

研究者番号：60169125

(3)連携研究者

()

研究者番号：